耕作放棄地再生利用交付金事業（経営展開）
実証ほ場(鋼管ハウス)実証結果

平成２４年５月
生 産 者：管野里志
協力機関：宜野座村後継者等育成センター
場　　所：宜野座村字松田港原

１．　実証の背景とねらい

本実証は宜野座村においてイチゴの栽培を行うに当たり、育苗方法を確立させることを目的として行うものである。

宜野座村では、平成１５年から後継者等育成センターにおいてイチゴ栽培に取組んだ。しかし、栽培技術は皆無に等しく、沖縄県農業試験場、九州沖縄農業研究センター、専門家の指導を仰ぎながら試行錯誤の後、平成２０年頃から栽培可能な見通しがついた。栽培技術が確立しつつあることから、当育成センターの卒業生がイチゴ栽培に取り組むこととなった。

後継者育成センターと農家（管野里志）が本格的に栽培を進める中、苗の確保が最も重要な課題であることが分かった。幼苗は病気に弱くさまざまな障害を起こし、結果的に栽培全体に大きな影響を及ぼすことになる。また、台風による塩害によって全滅しかけた事もあり、強固なハウスによる育苗が絶対必要であることから、平成２２年度耕作放棄地再生利用交付金事業（経営展開）により実証ほ場(鋼管ハウス)を導入し、安定的に高品質なイチゴの苗を確保する手法の確立を目的とした育苗の実証栽培を進めることとなった。

２．　実証の内容

・育苗のながれ

５月中旬、生産株よりランナー（400 株）を採取しポットに受け、乾燥を防ぐため一日５～６回散水発根を促す。約２週間で活着、６月上旬親株として６Ｌプランターへ３株づつ移植、化成肥料 10-10-10 を一鉢 50ｇを施用、生育状況をみて適宜液肥等で肥培管理しランナーの発生を促す、７月上旬発生してきたランナーを 10ｃｍポットに随時鉢受け（８月ごろまで続く）、鉢受け本数約 6000 株を活着後切り離し本苗として管理、錠剤肥料施用、随時適葉管理展開葉 3～4 枚に仕立てる、11 月上旬まで肥培管理養成の後、定植となる。

県外では、昼夜の温度差が広がる９月上旬頃から定植が可能であるが、この時期、沖縄ではまだ温度差が小さく花芽分化が起こらないため、温度差が大きくなる１１月からの定植が適している。

・病害虫対策

イチゴ栽培における重大病害にタンソ病があり、その対策または予防を行う必要がある。タンソ病は高温多湿化で発生が助長されるので換気に注意が必要である。害虫は、スリップス・ハダニが主で蔓延防止対策が必要である。

・品種の選択について

イチゴの品種として、当初から「さちのか」を中心に栽培に取り組んできたが、一番の課題は収量が低いことである。本村は、イチゴ狩りを中心に栽培を進めており、客を十分呼び込める果実収量が必要であり、品種の選定が重要である。

現在考えられる有望な品種としては、「かおり野」が上げられる。

「さちのか」の特徴

長所：糖度が高く、果実の硬さがあり日持ちは良い。

短所：タンソ病には一般品種並に弱い。連続出蕾性に乏しく収量の波が大きい。脇芽の発生が多く管理に手間がかかり、反収が低い。

「かおり野」の特徴

長所：タンソ病耐病性があり、花芽分化が早く年内出荷が可能。連続出蕾性に優れ収量が安定し、草勢が強く伝承がいらない。

短所：香りは良いが味が淡い。果実が軟化性で、硫黄病に弱い。

本実証においては、両方の品種を栽培し、比較する。

３．　実証の結果

(1)　株採取、ポット移植、定植の適正時期を徹底する。

(2)　タンソ病を蔓延させないよう観察しながら適正防除に努める。

(3)　潅水による水しぶきや雨などの跳ね返りで感染拡大するため、一鉢づつ丁寧に行うこと。

(4)　作用の異なる薬剤を週一回程度ローテーション散布する。それでもタンソ病は発生するので枯死株が出たらその周辺の株も感染しているとみなし、密封袋に入れ処分する。

(5)　強い光線を避けるため遮光率 50％の内張りネットの設置を行う。

(6) 生育に応じて適宜化成肥料や液肥料による施肥管理養成を徹底する。
(7) 病害虫対策のため、ハウスの開閉管理を小まめに行う。
(8) 品種については、イチゴ狩り向けには花芽分化が早く収量の多い「かおり野」が適している。一方、出荷を目的とするのであれば、果実が硬く日持ちの良い「さちのか」が適している。

4. 今後の課題と方向性

宜野座村がイチゴ栽培を推進し、産地形成を目指していくためにはこれまでの実証結果を踏まえ、更なる実証研究が必要である。特に初期段階での苗作りが重要であることから、病害虫対策や肥培管理など新たな技術習得が必要である。また、品種については、年々新しい品種がでてきており、現在扱っている「かおり野」や「さちのか」以外にも本村に適した品種の導入を検討する必要がある。